

統合保育場面における障害のある子どもの評価に関する研究

ーポートフォリオ (portfolio) を用いた試みー

○松井 剛太
(広島大学大学院)

守田 香奈子
(東広島サムエル保育園)

七木田 敦
(広島大学)

I. 目的

幼児教育における評価の基本は、保育者の記録である。保育者は、日々自身の保育を振り返り、気づいたこと、感じたことを記録している。そうして蓄積された記録から、さらなる保育を作り出したり、子どものよさや持ち味を発見したりしている。

ところで、近年、子ども一人ひとりのよい点や可能性、進歩の状況を把握できる評価としてポートフォリオ評価が注目されている。これは、思考力、判断力、表現力、あるいは、学ぶ意欲や態度を含む評価法とされ、学童期の総合学習でしばしば導入されている。幼児期においては、アメリカ合衆国やニュージーランドにおいて、プロジェクト研究の評価として、取り入れられていることが多い。

ポートフォリオ評価の特色を保育者の日常の記録に反映させることで、特に障害のある子どもを含んだ統合保育場面で有効な評価としても用いることができると考えられる。

そこで本研究は、統合保育場面での評価としてポートフォリオを用い、その有用性について、明らかにすることを目的とする。

II. 方法

1) 対象園

対象園は、H市にあるS保育園である。S保育園は、乳幼児クラスが2クラス、年少児クラスが3クラス、年中、年長児クラスが2クラスずつある規模の大きい保育園であり、障害児も何人か受け入れている。なお、Hは2003年7月下旬に保育園に入園し、8月終了時までの一定期間のみ年中児クラスに在籍していた。

2) ポートフォリオ作成の手順

本研究では、先行研究を参考に、ポートフォリオ作成の手順を以下のように設定し、評価につなげた。

- ステップ1 指導方針を決定する
- ステップ2 観察し、記録の素を収集する
(学習物を集める、写真を撮る)
- ステップ3 全体的記録をつくる
- ステップ4 エピソード記録をつくる

ステップ5 指導の結果を書く

III. 結果と考察

＜ステップ1 一方針を決定する＞

1) 対象児の決定

事前の観察から、友達とのかかわりが少ないHを観察の対象とした。Hは自閉的傾向があったため、特に、他者とのかかわりに関して課題があり、保護者の願いも、友達とのかかわりが少しでも持てるようにしたいというものだった。

【エピソード3：自由遊び場面 (7/25)】

保育者の支援に応じず、ほとんどの時間を1階の職員室で過ごす

エピソード1のように、Hは入園当初、クラスと別行動で、他児とのかかわりを持たなかった。

2) 方針の決定

事前の観察から、対象児Hの興味・関心を以下のよう把握した。

- ・プールが好き
- ・体を動かすのが好き
- ・手先が器用で何かを作るのが好き

これらはHが好み、日々行われる活動である。よって、以下の方針が決定した。

保育者（観察者）のかかわり

H児が友達と共有する時間が持てるように、クラスの環境を整え、支援する。

記録の観点

上記の場面を中心に、友達とのかかわりを観察し、H児の変容を記録する。

＜ステップ2 ー観察し、記録の素を収集する＞

1) 詳細に対象児の行動を記述する。

筆者らが、H児を対象に参与観察を行った。一週間の観察を任意に[月曜日、金曜日][火曜日、水曜日、木曜日]に分けて、二人で観察を行った。観察後は相互に連絡を取り合い、重要な出来事を伝えるようにした。

2) 作品を収集する。

Hが活動の中で制作した作品もポートフォリオの材料とした。

3) 写真をとる。

観察者は、H児の観察中、デジタルカメラを持参して、必要に応じてHの活動の様子を写真に撮った。写真は、記述した記録を裏付ける役目があり、それがあことで、第三者が見ても活動の様子を捉えやすい。また、観察者は常にHの活動に目を配り、Hのこういった行動に意味があり、どのような成長を感じたのか、敏感になっていないとよい写真は撮れないことから、保育者の子どもに対する感受性を養う効果もある。

<ステップ3 ー全体的記録をつくるー>

ステップ2でとった記録をもとに、全体的記録をつかった。全体的記録は、設定した書式に、その日のHの活動を時系列で記録したもので、活動が変わっても、前後の文脈がわかるようにしてある。

<ステップ4 ーエピソード記録をつくるー>

ステップ3で作成した全体的記録の中から、特にHの活動の中で、成長を示すと観察者が感じた重要な事項を抜粋し、その事象についての簡単に明快な説明を書く。また、写真を添え、第三者でも視覚的に分かりやすいように工夫した。

例.【エピソード10：貼り絵場面（8/5）】

観察者が「はさみ」の写真をみせると、席に着き、制作活動をする。らくがき帳へ貼り絵をした後、自分でマジックを取り出し、人に見立てて目と口を描く。クラスの子どもたちも加わり、一緒にやる。

エピソード10から、観察者を介して、クラスの子どもたちと場を共有して遊ぶことができたことがわかる。

【エピソード24：自由遊び場面（8/28）】

部屋でスライムをする。観察者が手を埋めると他の子が騒ぎ、「やって、やって」と言い、子どもたちどうしで手の埋めあいをした。

エピソード24から、観察者がきっかけとなって、その後、子どもたちだけでの活動にも参加したことがわかる。

<ステップ5 ー指導の結果を書くー>

これまでのステップからできたポートフォリオから、観察者が指導の結果生じたHの変容と、今後の課題に

ついて記し、指導の評価とした。

例. Hちゃんがクラスでの活動に興味を持ってくれるように、折り紙、絵の具、スライム等を用意した。保育者はHがそのことに気付くようにかかわりを持ち、Hが活動をしたときは、近くにいる子も一緒に活動できるように仲介した。その結果、Hちゃんが一階の職員室に行くことが少なくなり、その分、クラスにいる時間が増え、クラスの子どもとのかかわりが生まれた。最初は保育者を介してだったが、徐々に子どもたちだけでのかかわりも生まれるようになった。これは、Hの他児への意識と他児のHへの意識が相互に生まれた結果だと思う。

以上のステップを経て作成されたポートフォリオは、カンファレンスで、保育者相互に議論し、その後、保護者に手渡された。

IV. 結語

1. 保育現場との相性

ポートフォリオは従来の評価と異なり、保育者の制作活動をも含んだものである。つまり、子ども一人ひとりに対するいわば「成長アルバム」を保育者の観点で作成するという点が大きな特徴である。子どもの成長を記録し確認すること、またこのような記録の蓄積によって生まれるポートフォリオは、特に統合保育場面での障害のある子どもの育ちを表現するのに適した方法だと考える。

2. 保護者の参加

ポートフォリオは、写真や制作物を添えて保護者への情報伝達としても適している。そのため、保護者は子どもの園での様子を把握しやすいという利点がある。また、保育者が子どもを理解していることが保護者に伝わりやすく、子育てのパートナーとしての関係を築く上でも有効であると考えられる。

3. 障害のある子どもへの適用

一般的に、統合保育場面において、障害児は不適応行動を起こしやすいため、主に保育者はその軽減に努め、子どもの長所に目を向けることが困難である場合が多い。また、障害のある子どもは健常児と比べて、発達が捉えにくい状況にある。ポートフォリオは、子どもの長所に注目し、成長をとらえることに適している。特に様々な保育者が関わる場合が多い場合には、子どもの日々の様子や成長を詳細に知ることが可能となりやすいため、本研究のようなポートフォリオ評価が、実施しやすいものと考えられる。